筑前國續風土記 卷之二十五目錄

古城古戰場 二

夜須郡 古城十一所
古戰場一所

山隈山城址附原 粟林城址

阿彌陀峰古城 小鷹城址 彌長村古城

鼓ヶ岳古城 片山古城 千手村古城

杉本古城 古所山城址 上秋月村城址

下座郡 古城四所
古戰場一所

三城渡 休松古城一說曰
茄子町 岩切山古城

茶臼山古城 小田村古城

上座郡 古城十四所
古戰場一所

麻氏良古城 前隈山古城 志波古城

原鶴 三日月古城 長尾古城

鶺鴒木古城 米山古城一說國見
城と云 烏嶽古城

高鼻古城 村上古城 松尾古城

時山城 針目古城 眞竹山古城

嘉摩郡 古城七所

益富城址 たい王の古城 山野村古城

筒見岸殿二城址 馬見古城 片邊古城

穂波郡

古城十二所
古戰場一所

鬼杉古城 懸尾古城 八木山村古戰場

小佐古城址 内野村城址 扇山古城

茶臼山古城 城山古城 高山古城

木實山古城 笠木山古城 葛山古城

宮山古城

筑前國續風土記 卷之廿五

貝原篤信選定

貝原好古編録

竹田定直校正

古城古戰場 二

夜須郡

○山隈山城址附原

四三島の東南にあり。小早川隆景築かれしと云。山上を以、筑前筑後の境とす。本丸の址は筑後干瀉村に屬す。東南七間、南北十間あり。二の丸は西にあり。筑前筑後に分屬す。其中に境塚あり。三丸は東にあり。筑前四三島に屬す。城址の圍めぐりの坂にたて堀多し。此山筑後にては花立山と云。山上に登れば、筑前筑後肥前の内、眼界廣く見ゆ。山の四方二里許は平原の地にて、總て隈原と云。其内處々村里も有。此山は筑後の内狭く筑前の内廣し。此原は筑後の内

廣く、筑前の地少し。筑後の境に、太刀洗川たちいらひと云川あり。此處は古戰場なりし故、名付しにや。

延元四年七月、南朝の御方肥後の菊池肥後守武光蜂起して、後醍醐帝第六の皇子征西將軍の宮を大將として、太宰府に寄ると聞えければ、太宰少貳筑前守賴尙、子息新少貳忠資、甥太宰筑後守賴泰、筑後新左衛門賴信、外様には相馬くま、日下部くさかべ、牛糞うぐそ、松浦、千葉、草野、高木、綾部あやべ、藤木、高田、三原、秋月、澁屋、本馬、松田、川尻、詫摩たくま、鹿子木等かのこぎを相催し、其勢六萬餘人杜もりの渡りを前に當て、味坂あじさかの庄に陣を取。菊池方には征西將軍宮洞院大納言、竹林院三位中將、春日中納言、花山院四位少將、土御門少將、坊城三位、葉室左衛門尉以下、公卿十一人。新田の一族には、岩松相模守、世良田大膳大夫、田中彈正少弼、桃井左京亮、江田丹後守、山名因幡守、堀口三郎、里見十郎。侍大將には、菊池肥後守武光、子息肥後次郎武政、甥肥後二郎武信、同孫三郎武明、

赤星掃部助武貫、城越前守、名和伯耆守長秋、宇都宮刑部丞、千葉刑部大輔。外様には、溝口丹波守、牛糞越前守、河邊次郎、稻佐治部、澁屋三河守、島津上總四郎、高山民部、伊藤攝津守、土持十郎、波多江三郎、此等を宗徒の兵として、都合八千餘人、筑後國高良山、柳坂、水繩山三箇所かうらさんに陣を取、七月十九日、菊池千年川を打渡し、少貳が陣に切懸る。原田、秋月、三原、高田、松浦の者共、少貳が先陣に有けるが、矢一も射ず、我先にと逃入ければ、少貳も立足なく引退き、山隈原に陣を取。山隈原、太平記三十卷には大原と有。菊池續いて寄せんとしけるが、あはひに深き沼有て、細道一筋在けるを、少貳より三箇所掘切て小橋を渡し置ければ、人馬打並て渡すべきやうもなし。兩陣僅一町七八段隔て、旗の紋あざやか鮮に見ゆる程なれば、菊池金銀にて日月打たる旗の蟬本に一紙の起請文を押付て、眞先に指出す。是は去年太宰少貳御原郡古浦と云所にて、一色左京大夫に討れんとせしを、菊池武光後

詰して少貳を助けたりしかば、悦に堪ず、今より子孫七代迄、菊池の人々に向て弓を引、矢を放つ事有べからずと、熊野の牛王の裏に、血を絞りて書たりし起請文なれば、幾程もなく心替したるきたなさを天に訴へ、且は諸人にしらしめん爲なりけり。八月十三日の夜、菊池夜討に馴たる兵五百人をすぐりて、山の根より搦手へ指廻し、追手は七千餘人三手に分れて押寄る。追手今は近付んと思ふ時、搦手の兵五百人、敵の中へ切て入、ときを揚て、散々に戦ふて、後へぬけたり。分内なひろからぬ所、少貳が六萬餘人の勢、沓の子を打たる様に、陣屋をならべ集り居たれば、ときの聲に驚き、敵を見分たる事もなく叫喚おめきさけんで、同士討をして三百餘人死けり。敵陣騒ぎ立て、夜既に明ければ、菊池孫三郎武明、城越前守、件の起請の旗を進めて。一千餘人少貳が陣にかけ入、新少貳と戦ひけるが、父の起請や子にたゝりけん。新少貳終に討れにけり。是を見て朝井但馬守、筑後新左衛

門、肥前刑部大輔、窪能登守等を近付、敵に引組々々指違て死ければ、菊池方にも菊池武明、同越後守、賀屋兵部大輔、宇都宮刑部丞、國分次郎以下、宗徒の兵八十人討れにけり。二番に菊池肥前次郎武信、赤星掃部助武貫、千餘人にて進めば、少貳方より太宰筑後守頼泰、同出雲守二萬餘人にて、相かゝつて戦ひけるが、少貳方には筑後守頼泰生捕れ、菊池方には赤星武貫討れにけり。此時宮方に結城右馬頭、加藤判官、熊谷豊後守、三栗屋十郎、合田筑前入道、松田丹後守以下の兵三百餘人戦死す。將軍方には饗場右衛門藏人、山井三郎、相馬小太郎、木綿ゆづ左近將監、西川兵庫助、日下部六郎以下七百餘人討れにけり。三番には宮の御勢、新田の一族、菊池肥後守一手に成て三千餘人、敵の中へ喚おおいて懸入ければ、少貳、松浦、日下部、山鹿、島津、澁屋の兵二萬許、左右に分れて散々に射ける間、宮も三ヶ所手を負せ給ひければ、日野左中辨、坊城三位、洞院大納言、花山

院四位少將、北山三位中將、北畠源中納言、春日土御門、葉室高辻以上九人の公卿。宮を落し參らせんと踏止て討れ給ふ。是を見て、新田の一族、世良田、岩松、田中、桃井、江口、城口三十餘人、敵の真中へ、會釋あしやくもなく懸入て戦ひけるが、大敵破れ難くして、残り少に討れにけり。菊池親子は、宮の御手を肩せ給ふのみならず、川卿雲客、新田の一族數を盡して討るゝを見て、何のために惜むべき命ぞや。つゞけや者共と呼で、真先に懸入ける。敵大將と見知ければ、鏃をそろへて討けれ共、鎧能ければ裏かゝす。馬は射られて倒れども、乗手は疵も被らねば、乗替ては懸入く、十七度まで懸入るに、武光冑を打落され、小鬘二太刀切られながら、猶敵の中へ破て入、卯の刻より酉の下迄、息をも繼ず戦へば、敵の方には新少貳を始として、一族郎從四百餘人、其外軍勢二萬六千討れ、手負一萬八千餘人也。少貳今は叶はじとて、太宰府へ引退き、寶滿が嶽の麓なる居城に引籠る。

菊池も軍には勝たれ共、討死の者を算ふるに千八百人なりければ、續て敵にもかゝり得ず、暫く手負を助てこそ、又合戦をせむとて、肥後の國へぞ引返す。

九州にてかく人の多く亡びし事、前代未聞の事也。

此時の戦の事、太平記三十三卷及九州記等に詳也。但太平記と九州記と所々に相違あり。一説に三原郡大保おほほと云所、山隈山より西一里にあり。是則太平記にしるせし大原也と云。右にしるせる大刀洗川も、此時太刀を洗し所なるにや。

○栗林城址

栗田村に有。秋月氏の家臣深江伯耆守と云者居れり。又秋月氏の臣芥田悪六兵衛が居たりし宅址もあり。

○阿彌陀峰古城

久光村にあり。秋月氏の端城のよし。其家臣板並左京進守りしと云傳ふ。

○小鷹城址

彌長村に有。むかし檜原備後守高利と云し者、此城を築て在城せり。其後秋月種實が出城と成、家臣内田善兵衛を城番とせらる。備後守が末、檜原刑部少輔と云者は、秋月氏の幕下と成、御笠郡不動が城に

移りぬ。其子兵庫、秀吉公九州征伐の時、秋月氏の先手として戦死せり。

○彌長村古城

彌長村の北の山に有。深江伯耆在城すといへり。

○鼓岳古城

下淵村にあり。大友旗下の城也しといふ。

○片山古城

持丸村に在。是秋月氏の端城にして、其家臣福武美濃入道居住せりといふ。

○千手村古城

此村に古城あり。秋月の端城也。福武美濃守れりと云。村の南、丸熊山に千手観音堂有故に、千手村と云由也。

○杉本古城

上秋月村にあり。是秋月種實の邑城也と云。

○古所山城址

山上に白山権現の社あり。社より一町許西の方、山の

九分の上に城址有。是、秋月氏代々の城なり。秋月氏の事

詳に夜須郡秋月の記にしるせり。其前に大門の跡あり。あ始は石垣残り

て在しを、元和年中に崩じ去れるとかや。城址の下
一町許に、泉流出る所あり。清冽也。せいれつ大暑にもかれ
ず。城有時の用水なるべし。一日夜に千人を養ふべ
しと里人云。

○上秋月村城址

此村の高き岡の上に八幡の社あり。其岡秋月氏の時、
家臣坂田氏代々居城せしと云。

下座郡

○三城渡

長田村に有。此川元和の初の比迄は猶大なりしが、
今は水あせて小川となる。建武三年の春の比、菊池
掃部助武俊と少貳太郎頼尙と、此渡にて合戦せし事、
太平記十六卷に見えたり。御笠郡の水城には非ず。
水城と書しは誤れるにや。順和名抄に、此郡の内三
城の郷あり。此川の邊を云なるべし。

○休松古城 休松一説に茄子町と云。

柿原村の上の山にあり。永祿十年八月に、秋月種實、毛利元就に一味し、其勢ひ強大なるよし、大友家に聞えければ、先秋月を退治せずんば、忽大事出来なんとて、戸次丹後守鑑連、吉弘左近大夫鑑理、臼杵越中守鑑速、此三將二萬餘の軍兵を引卒し、八月十四日に發向し、甘水長谷山迄押詰る。種實が勢杉の本の邑城より打て出、一日に七度の鎗合有。戸次丹後守は十時、安東、由布、綿貫等を左右に立て、自身太刀打する間、相従ふ軍兵面もふらず攻戦ふ。日既に暮ければ、秋月勢は城に引取り、寄手も陣をとる。明れば十五日早天に、寄手又城におし寄攻ける間、種實杉の本の邑城を引拂ひ、軍勢を卒して、古所の嶽の城に引上る。戸次丹後守は後備にて茄子町に陣を取。臼杵越中守は觀音岳に陣を取。吉弘左近大夫は道場山筑後路を中に挟て、南北の岳に陣をなし、古所山を攻んとす。然れ共古所山は嶮難なる高山にして、

中々たやすく攻上るべき所ならねば、寄手も城を見上たる許にて、別に手立もなし。又城中の者共も只嶮嶮を頼み、攻落されぬを幸として、敵を退くる謀もなし。高橋鑑種、秋月種實兩人の方より藝州に使を遣し、加勢を乞事頻り成しかば、元就許容して、中國勢を渡さるよし聞えければ、豊前筑前の國士の中、元就にくみし、大友を背く者、數多出來て、中國勢の寄來るに、各自分の居城をあけては不可然とて、逸く引拂ひ、己が在所くくに歸りけり。かゝりければ、逆心なき國士給人も各在所へ歸りける。かくて毛利勢渡海の事實に聞えければ、秋月の寄手も先筑後國高良山まで引取、防戦の用意をすべしと、大友宗麟下知せらるゝによりて、引取んとせし所に、九月三日の夜、秋月勢四千餘人打て出、臼杵越中守、吉弘左近大夫が兩陣に、夜討をかけて突みだす、大軍かねてより引取んとせし所に、不意の夜軍出來ければ、豊後勢以外の外大崩して、芥田千手へ引も有。甘

水、長谷山を打通り、奈良原、熊江に退くもあり。
秋月勢爰かしこに追かけて、敵を討事夥し。茄子町の陣にも引退さける勢に、秋月の人数追すかふてどよみ懸りける。夜半の事にてありしかば、戸次丹後守が手の者共、崩かゝる味方を敵ぞと心得て、進みかゝつて同士討をする程に、是は味方ぞ。白杵吉弘が手の何がし誰かしと呼び叫べ共、大勢騒ぎ立たる折節なれば、分明に聞分る者もなく、突伏切伏したりけり。爰において白杵吉弘が手にて、名を得し者共、多く同士討に逢ける。鑑連是を見て、いかに夜半なればとて、敵味方をしらぬ事やあると怒て、逃來る御方を扶け、真先に進み、自身鎗おつ取、追來る敵を待受く、突倒す。かゝりければ一手の軍勢鑑連に恥しめられ、同士討を止て秋月の勢と戦ふたり。され共なびき立たる豊後勢なれば、白杵戸次吉弘の勢、共に敗北して、豊後をさして引取り。秋月の軍勢も甘木高場邊まで追討にする程に、豊後國住人利光兵

庫助、橋本玄番允も討れにけり。鑑連が手にも戸次
中務丞鑑方、同治部少輔親宗、同刑部少輔親重、同
兵部少輔鑑賢討死す。此等は皆大友親戚なり。家來
には十時左近大夫、綿貫勘解由、由布五兵衛、安東
右馬允、堀新右衛門を始として、勇士五十八人討れけ
り。永祿十年九月三日、休松夜軍是也。三奈木村の
内横よこ大道と云所に、此時討死せし人々の首を埋めし
塚有。名を首塚と云。近き比、此首塚を發きし者有
しに、甚崇ありしとて村人おそる。

○岩切山古城

三奈木村に有。いかなる人の居たりし城にや、詳な
らず。此山の前に人埋塚とてあり。此城址に今は清
岩寺と云禪寺有。

○茶臼山古城

荷原村にあり。城主不詳。岩切山と此城と取合有し
と云。又此村の中に、秋月氏の家臣三奈木彌平次が
宅の址とて竹林の中にあり。其かまへ廣し。

○小田村古城

小田村の枝村、小作家と云所に有。秋月の端城にして、野中彦兵衛と云者城代たりしと云。

上座郡

○麻氏良古城

山田村に屬す。麻氏良の神社のある所則本丸也。此城は秋月種實の築し所にて、喜津瀬因幡、同主水と云し者城番たりしとかや。喜津瀬一説に云吉瀬。小早川隆景此國の主たりし時は、仁保右衛門大夫隆康と云者を置く。隆景の養子中納言秀秋の時には、伊藤雅樂助と云者城番たり。黒田長政公入國の後、家臣栗山備後利安に一萬五千石采邑を給り、當郡の事を司どらしめて、此城に置れける。元和元年台命有て、國々の端城を崩されし時、此城をもこぼてり。此城の麓に栗山備後か居たる宅の跡あり。其側に楠の木あり。里人の曰、此木領主の亡んとする時は枯る。又他人の領となれば則榮ふ。驗しるしあらざる事なしといふ。

○前隈山古城

麻氏良山の下に前隈山とて小山有。是麻氏良城の端城也。

○志波古城

志波村の境内、烏山の北五町許に城山あり。平家の古城と云傳へたり。亦本陣山と云古城有。秋月氏の端城成しと云。

○原鶴

久喜宮村に原鶴と云所有。是秋月氏と大友方と合戦せし所也。其戰場今は畠となれり。鎧畠と云所有。是軍勢鎧をきたる所と云。此原鶴合戦は天正九年の秋の比、秋月種實の軍勢、問注所治部少輔鑑景を案内者として、筑後國生葉郡いくはのにはたらく。同國長岩の城に問注所刑部少輔統景、町場與兵衛楯籠りて大友方をするといへ共、無勢なれば、中々秋月が大勢を防ぎ返す事叶はず。飛脚を以て豊後に急を告ぐ。依之大友より生葉いくはに軍勢を向らる。兼てより日田球珠くず兩郡

警固のため遣し置たる、朽網くたみ宗曆を大將として、三千餘人日田より直に筑後國生葉郡に押出す。十一月四日、宗曆大聖寺の城に取かけ、問注所治部少輔鑑景、森播磨守實方秋月種實の家人なり。を攻る。秋月種實是を聞、大聖寺の後詰には自身向はで叶ふまじとて、内田善兵衛、長谷山民部少輔を先陣と定め、秋月の城を打出まてら麻氏良の城まで押來る。爰に三日逗留し、旗本の勢を集め、八千餘人にて香山に陣を取。大友方にも、宗曆大聖寺の城を攻め、秋月定て後詰有べしと用心したる事なれば、一萬田いちまた五千餘人豊府を立て、是より生葉に打出、朽網くたみと一に成て大聖寺を卷ほぐし、千年川長瀬を打渡り、針目の城此郡にあり。に陣を取。秋月是を見て、原鶴に陣を張はって待受合戦す。秋月は兼て豊前の高橋元種にも出勢有べきよし云遣しければ、元種夜を日についで十一月七日の夜、當郡池田と云所に著、伏かまりを置いて追手の合戦の始るを待居たり。豊後勢是をゆめにも不知、翌八日に八千餘人の勢、

原鶴に到つて矢軍を始め、入亂て攻戦ふ。かゝりける所に、豊後勢の内より、野上々野入道一閑と名のり、三尺五寸白柄の長刀莖短に取、秋月勢を薙倒す事、草を刈がごとし。秋月方の軍兵、此勢ひに辟易して、三町許引退く。爰に秋月の士三奈木彌左衛門が子に彌平次とて、生年二十二に成けるが、種實の前に進み出て云やうは、いで野上の首取て、御方の兵に心安く軍を致させ申さん。然ばそれがしも討るべし。最後の御盃を頂戴せんと望みければ、士の一言は綸言にひとしければ、とむるとても、といまるまじ。さらば盃をさゝんとて、土器取寄、自二度酌で三奈木にさゝれければ、彌平次大に悦び、三度酌で盃をさし置、馬引寄打乗り、山下に馳出る。種實もをしく思はれければ、木所きど玄蕃、横内七郎左衛門、曾我平右衛門を差添らる。彌平次は敵近く成ければ、秋月が士三奈木彌平次と云者也。高名したりと匂り給ふ野上殿に見參せんと懸向ふ。野上出合て、件の大長刀を以

て山王の森を南北に馳廻り、彌平次と戦ふたり。暫し勝負もなかりければ、馳竝で引組、兩馬の間に落重る。其時秋月が士横内木所落合て、終に野上の首を取。豊後の大勢是を見て、槍先を揃へ、三奈木彌平次を始、横内七郎左衛門木所立蕃をも討取り。其後敵味方入亂戦ひけるが、軍半に高橋元種が伏兵、池田の大竹藪より一度に起り、豊後勢のうしろより関を作て進み來る。豊後勢は前なる秋月勢とこそ爰を先途と戦ふたれ。後は味方の國なれば、心安く思ひしに、不意に後より伏兵起りければ、あわて騒て山王の森長瀬をさして崩かゝる。秋月高橋兩家の勢勝にのり、関を作りて追かゝりければ、敵に追れ水に溺れ、死する者幾らと云數を知らず。秋月方に討取首數七百五十、原鶴に切懸て勝関を取行ひ、麻氏良の城に引上る。豊後勢は今度の戦に、能士多く討死しければ、筑後在陣も成がたく、皆日田球珠迄引取り。

○三日月の古城

池田村に有。城の形三日月に似たる故名付く。是は秋月種實取立し城也。城番には中願寺左近將監と云者を置かれしとかや。里屋敷の址もあり。

○長尾古城

林田村に有。此城も秋月種實の端城にして、木村甲斐同源太左衛門と云者を入置けると云。木村甲斐守が妻は、すぐれたる勇女成しとかや。或時大友宗麟千五百餘人の勢を遣して、此長尾の城を責らる。時に甲斐守は端午の禮として秋月に在しが、甲斐守が妻甲冑を帶し白綾の鉢巻し、長刀を横たへ出て、塀内を廻り、旗さし物を立させ、大手を堅め、士卒に下知する事勇將のごとし。城中の士、しばし猶豫する所に、女房怒て敵を追立、御方の色を直さずば、二度此城に歸るべからずとて、馬引寄打乗、長刀をひらめかし、大手の門外まで出て下知せしかば、城中の人、數を盡し、出て戦ひける。餘りはげしく攻合せめけれ

ば、城中の兵多く討れぬ。女房是を見て、爰は引取べき所也と下知し、城中に引取しとかや。

○鵜木山古城

林田村にあり。是は長尾の城の出城也と云。

○米山古城 國見の城とも云

白木村に有。昔郡士白木立蕃允と云者在城せり。後に秋月氏の端城となり、其家臣松原筑後と云者在城せしと云。

○烏嶽古城

寶珠山村に有。むかし森了心と云者此城に居たり。後に郡士寶珠山遠江守住す。是秋月の一族也。

○高鼻古城

花園山の上にあり。城主不詳。隍も残れり。古き墓所あり。誰人を葬りし所にや不知。

○村上古城

黒川村黒松と云所にあり。城主不詳。

○松尾古城

小石原村に有。昔寶珠山山城守と云者住せし城なりと云。長政公入國の後、家臣中間六郎左衛門統種を此城に置れしが、大坂陣の後、元和元年公命によりて崩さる。

○峙とや山城

佐田村に峙山とて、郡中にていと高き山有。大友宗麟耶蘇宗となり、多く神社佛寺を焼拂ひし折節、彦山の座主を攻し時、座主ざす此山に籠りし故、座主の城と云。

○針目古城

穂坂村にあり。穂坂と大山の境也。東は豊後に境さかへり。是秋月種實の築し城にて、初山九兵衛大山源左衛門と云者を城番として入置ける。然るに初山が與力に、高久保彦次郎と云者有。其妻容色甚うるはしかりければ、九兵衛密通しける。九兵衛が妻此由を聞、甚ねたみ怒りけるが、七夕の祝儀として、與力の士の妻共、皆初山が室に來り謁す。然るに初山の

室彦次郎が妻に一言の詞もなく、利、他の與力の妻には定例にて盃をさしげるが、彦次郎が妻には盃をもささず。彦次郎の妻は過にし頃、九兵衛と密通せし事あらはれたりと恥かしく思ひ、急ぎ家に歸り、夫に文を書置自害せり。高久保面目を失ひし事を憤り、筑後國長谷の間注所刑部少輔統景を頼み、謀叛企て、初山を討んことを謀る。或時、大山源左衛門秋月に赴き、九兵衛ばかり城に残り、無勢なる隙をうかひ、敵の兵を導入、裏切して初山夫婦を切殺す。残る者或は討死し、或は落失ければ、刑部少輔豊後に注進し、大友方の人數を招寄、勤番をさせける。是天正九年の事也。然るに原鶴合戦に秋月打勝し後は、また此城を秋月方に取、中願寺左近將監が子、中願寺下總を入置ける。此城の番頭の名、九州軍記には木村甲斐同源太左衛門とし、高久保が妻に密通せしも源太左衛門が事とす。然共大友興廢記に、木村甲斐は長尾の城番たりし由記せり。又村翁の説に、高久保が妻

に通せしは初山九兵衛と云傳へたり。然ば則是を實説ならん。

○眞竹山古城

益末村に有、秋月氏の端城にして、野手のつて讚岐と云者城番たりしと云。

嘉摩郡

○益富城址

此城は下益村にあり。大隈町に近き故、世人は大隈の城と云。城の廣さ南北四十八間、横九間、高さ四十八間有。是秋月種實の父宗全隱居城成しを、天正十五年秀吉公九州征伐の時、四月朔日丹波少將秀勝を大將として、蒲生忠三郎氏郷、前田肥前守利長を副將とし、北陸道の勢を以、此城の三里東なる豊前岩石の城を攻させらるゝに、一日の内に落城せり。其勢におそれ、此城に在し者共忽城を出て、皆秋月の本城、古所山に引退きしかば、其跡に秀吉公御陣を移され、同四日まで此城に逗留し給ひ、八町坂を

越えて秋月へ越し給ふ。長政入國の後、此城を改め築き、家臣後藤又兵衛基次を置く。又兵衛遂電せし後は、毛利但馬友信を置れしに、元和三年台命によりて城を崩さる。

○たい王の古城

上山田村に有。筑前中納言秀秋の時築て、家臣日野龍右衛門を入置く。

○山野村古城

山野村の境内に古城の址一所有。宇佐大宮司宮成氏いたうづ到津氏が城址なりと云傳ふ。此兩氏は今も宇佐の大宮司なり。いにしへ彼兩氏より爰に城番を置しにや。

○筒見岸殿二城址

此二城の址、下山田村にあり。昔の城主しれず。

○馬見古城

馬見村の上に古城の址有。馬見の城と云。永祿の比、大友宗麟筑前の内、所々城番を入置れける。此馬見の

城をば毛利兵部少輔鎮實に預け置れける。然るに天正七年に、秋月より使を以鎮實に告て、此方に一味し、人質を出され候へと申遣す。鎮實心底には同心せずといへ共、今か様に云送るは、龍造寺隆信方に心を合、一手立の催し有べし。其意に背かば大なる禍出来るべし。先人質を出し、一旦偽の和睦をなし、時の難をのがれなば、後は又謀を以て人質を取返さんと思ひ、同心のよしにて使者を返し、十二歳のむすめに此由を云聞せけるは、汝幼少なれ共能きけ。秋月種實より人質を出すべしとの使來る。今彼が心に背かば此城に攻來るべし。當時我手勢を方々に遣し置て、人數少ければ必此城を敵に取られ、我が名を失ん事無念也。然らば一族皆亡び、汝らも殺さるべし。只今人質を出す事は城を敵に取られず。末まで無事ならんとの謀也。然る故、汝を質に出す也。され共行末、大友屋形に逆心して、秋月に一味する事は思ひもよらず。然らば後には、汝敵のために殺る

こと有べし。若其沙汰あらば人手にかゝらず自害すべしと云ふくめ、小脇指を娘にわたして、汝が捨ん命、屋形の御ため、又は父が忠義の心故と思ふべしと云聞せける。其時母も泪を押へて、高さも低さも、子をおろそかに思ふ者はなけれ共、今父ののたまふごとく、汝が命にかへても、屋形様に御敵は被成まじ。たとひ娘の命を惜み、謀逆人と成ても、父の冥加盡き、家亡びなば、汝が身もやはり安穩成べき。只ひとへに君に命を奉り、父の名をくたさじと思ひ切らば、天のめぐみありて命も助り、父もろ共に全かるべしとぞいさめける。娘泪の下より申けるは、御心安おぼしめし候へ。我が命は父にまゐらせ候。城を能御持、屋形様へ忠義の御奉公も成候へ。我が命を御をしみ、未練の御心持有べからず。今か様の事さぶらはずば、いかでか我屋形様の御爲、又は父の御ためになる事あらんやと云て、其後はさらに泪をこぼさざりき。鎮實聞て、汝幼少といへども、志を感入たるぞ

とて、使者を添て秋月へぞ遣しける。程經て後、鎮實が家人御手洗五郎三郎といふ才覺ある者、魚商人と成て、魚の腹に鎮實が狀を入、彼娘の住る局つはねに遣し、八月廿七日の夜、搦手より忍び入、ぬすみ出すべしと約して、其期に至り、難なくぬすみ出しける。御手洗が手立にて、馬見へは行ず。豊後の日田へのけ置、後には坂本十郎が妻と成ぬ。宗麟御手洗が功を感せらる。

○片邊へ古城

椎木村に有。城主は毛利鎮實が一族勘解由と云しとかや。山下に東光寺と云禪寺あり。此寺に毛利勘解由が墓有。其位牌に天正六年とかけり。

穗波郡

○鬼杉古城

大野の山上にあり。何の時いかなる人居たりしにや不詳。

○懸尾古城

内住村の内に入り。是又城主の名不知。

○八木山村古戰場

上村に城が尾と云山有。南の高山龍王嶽につゞける
ひき、山也。村民の云へるは、天正の比にや、立花
の戸次べつき氏の兵共、此所に取上りしを、秋月氏の軍勢來
り責ける。薩摩勢も秋月勢に助合て戦ひけるが、其
時多くの人数討死せり。其死骸を埋し所、城が尾の
西に有。千人塚と云。今按ずるに、天正九年十一月
の比、豊後大友家の軍勢、筑後國生葉郡いくはにうち出ける
故、秋月種實上座郡に出張して對陣するよし、風聞有
けるにより、立花の戸次道雪、岩屋の高橋紹運、兩家
の勢五千餘人を卒し、秋月勢を遮り分させんため、秋
月領内に働き、飯塚片島の邊まで悉く放火すれ共、出
合敵なければ、同月六日に引取んとす。秋月方には、
種實上座出陣の留守なれば、道雪紹運と平場にての
合戦成難るべし。只敵の引取時、山道のせばき切所せつしよ、
備のまはらぬ所に追懸て討べしと、兼て白井、扇山、

茶臼山、高の山、馬見などの城代共と、僉議し置たる事なれば、四五千人起りて、戸次高橋兩家の勢、引拂ひ行跡を追てぞ懸りける。道雪紹運是を見て、すこしも敵にかまひなく、足輕共を後陣に立、遠矢に敵の付來るを防がせ、静々と引退く。秋月勢是を見て、急に討て競ひ懸る。道雪紹運八木山の東の坂にて、先陣後陣一度にとつて返して突懸る。秋月勢の旗下の士共、暫し支へて戦ひしが、終にこらへず引退くを、追詰て討程に、穗波郡土師と云所迄三里餘の間、一度も返し合せず。道雪紹運の手に首數二百三十打取、今は是迄也とて閑に引返す所に、秋月留守居の家老共此由を聞付、上野四郎右衛門、坂田市之丞并豊前城井長野、上原が勢、上座出陣に催され、只今秋月に着陣したるを引率して、五千餘人臼井坂を打下し、屋山原より横合にぞ懸りける。是を見て最前退散せし秋月勢ども力を得、一に成合て、都合八千八百餘人急に追懸たり。道雪、紹運良將なりといへ共、今朝よりの合

戦に人馬共につかれたり。秋月方はあら手にて、しかも大勢成ければ、返し合て戦ん様もなく、土井を下りに引退く。秋月勢は勝に乗て、引おくれたる敵共を追詰々々、三百餘人討取けり。上野坂田は種實に従て、多年軍功ある者共なれば、敵の返すべき廣みにては、遠矢に鐵砲を打懸、閑に追ひ、敵の返し難き切所にては、関を作り懸、追詰々々討程に、さしもの道雪、紹運一度も終に取て返さず。され共さすがの良將なれば、糟屋郡へ難なく引取れける。かゝりければ、秋月勢も今は是まで也とて、八木山より引返し、追討にしたる首四百餘八木山村の東の嶺に切懸て、秋月に歸りけるとぞ聞えし。右にいへる城が尾千人塚なども此時の事にや。

○小佐古城址

北古賀村の内、高田の境の山上に城址二所有。城主不詳。

○内野村城址

此村の上に高石の城とて古城址有。城主の名しれず。又町はづれの西の山に城あり。桑の木の城と云。是又城主の名詳ならず。

○扇山古城

阿惠村に有。秋月の端城也。村民は修理殿城と云。然共其姓氏不詳。

○茶白山古城

阿惠村にあり。秋月の端城也。

○城山古城

久保白村にあり。秋月の端城なり。

○高山古城

高山村に有。秋月の端城也。

○木實山古城

河袋村かうぶくろに有。秋月の端城也。

○笠木山古城

庄司村にあり。本丸、二丸、三丸の跡段々にあり。から堀有。此西の麓は大賀畑の下、千石原也。此山

遠所より能見ゆ。始宗像の端城にして、占部越前守
宗安在城す。其後秋月氏の城と成て、桑手石見・柏
井九郎左衛門、惠利出雲此三人城代たりしと云。

○葛山古城

庄司村にあり。笠木の出城也。

○宮山古城

津原村の宮山の上にあり。小き城址也。寶滿の城主
高橋氏の家臣岡松八郎左衛門と云者是に住せしと
云。